



美濃加茂 24景

 みのかも文化の森／美濃加茂市民ミュージアム  28-1110

16 俳人たちの見つめた風景

瑞林寺（蜂屋町上蜂屋）から西へ山沿いに進むと、下蜂屋には天神神社や巢雲院があり、これらの歴史は室町時代にまでさかのぼることが知られています。また下蜂屋下東には、茶磨山（ドンケ山）があり、南に広がる水田を見渡せるような小高い丘になっています（下東公民館裏手）。ここに庵を建てたのが、江戸時代の俳人堀部魯九（生年不明ー一七四三）でした。魯九は、そこからの眺めを「百田もうろう」として、田かへし、田植、田刈、麦蒔すべて農業の折を見つくすなるべし」として、村の風情を記しました。

魯九は、下東の堀部五兵衛の次男として生まれ、松尾芭蕉の高弟で犬山出身の内藤丈草、沢露川（三重県伊賀市出身）らに俳句を学びました。二人の師や美濃で俳諧を開いた各務支考が、魯九の庵を訪れています。また庵には、俳句を学ぼうとする地域の人々が集いました。「蜂屋元禄俳人」として知られる九人のことが、瑞林寺境内にある石碑に刻まれています。人々はこのような場所に集い、魯九の庵や付近にも刺激されたことで、それぞれに句を詠みました。

ここでは、およそ三百年前の俳人たちの見つめた風景があります。